

三味線演奏家であり、作曲家でもある本條秀太郎さんが三味線の持つ表現の自由闊達さを基に、現代の伝統音楽として創ったのが「俚奏楽」である。ジャンルを超えて演奏活動するとともに、多くの演奏家から作曲を委嘱されている。

三味線演奏家・作曲家

本條 秀太郎さん

■創作された三味線音楽「俚奏楽」というのは？

三味線（三味線）が琉球から入ってきた時、「どう弾いたら良いのだろうか？ どうしたら良い音が出るのだろうか？」と、きっと人々は想いを巡らせたのでしよう。当時は、受け継がれてきた旋律を素歌で歌うのが一般的でした。そういう歌



茨城県生まれ。三味線を篠塚みつ師、長唄を稀音家芳枝師、民謡を二代目大船繁三郎師、藤本琇文師に師事する。1971年、本條流を創流。松尾芸能賞、芸術祭賞、芸術選奨文部科学大臣賞、紫綬褒章等を受賞(章)。

民族的なリズム感を乗せる

に三味線の伴奏がつき、三味線音楽が形成され、長唄や常磐津など、さまざまな様式が出来上がりました。明治以降には洋楽の影響が見られる「東明流」や「大和楽」が生まれ、三味線音楽の一つとして確立しています。私も先人と同じく、良いものを追い求めるなかで、三味線音楽に民族

的なリズム感を乗せられたらと思いました。民俗芸能や民謡の、深い、深いところにあるリズム。日本は世界から見ると小さな島国でしようが、地域によってリズム感や音のスケールが見事に違う。それぞれが豊かで魂を持っています。「俚奏楽」はそういうものを取り入れた三味線音楽です。「俚」は、「人」に「田」と「土」と書きます。自然と共にその土地に生きてきた人間の営みを、日本民族が伝えてきたものを、「俚奏楽」で現代に表現できたと考えています。

■江戸時代に流行した「端唄」にも力を入れていきますね。端唄は人々の暮らしに密



本條さんの舞台（橋音楽株式会社提供）

着した音楽です。江戸の粋、情緒があります。流行歌というと、邦楽をやっている人には、一段低いように感じられると思いますが、宮中音楽以外は全部流行りもの。人々の心を捉えているから流行するのです。音楽は今を生き延びないと意味がありません。「古典」と崇めているだけでは、結局廃れてしまう。

不便さに美学を感じる日本人 演奏会は明年2月1日 紀尾井小ホールで

生活とつながっていることが大事だと思えますね。

■伝統的な日本の音楽は、洋楽とは音も演奏法も違います。音楽の発展の仕方でも感性も、日本と欧米で異なります。同じ土俵で考えない方がいい。日本の音楽は、欧米の音楽とは異なった形で日本人の気持ちを表現しているのです。

■日本人は伝来した楽器や音楽を、時間をかけて日本化していきますね。日本には「不便さ」に美学があるのでしょね。不便で手の掛かるものの方が、思いがっかり伝わるという考え方があっていいと思います。三味線も弦は僅か三本です。さまざまな音色を出すために弦の数を増やすのではなく、決められている弦数の中で奏法に工夫を

凝らし、心を込めて弾くのです。■本條さんは多くの師に学ばれました。長唄の師匠ですが、三味線は、もちろん教えてくれるわけですが、それよりも感性を豊かにすることを覚えなさいと、稽古場が上野だったので「本物を観ていないと駄目だ」と言っていて、よく美術館に連れて行ってくれました。ある時は「きょうは、お散歩」と言ってお野の山を歩きながら昔の話をしてくれたり……。そのようにして育ててくれました。私がついた師匠はそれぞれに、「こころ」を伝えてくれたのです。

■本條さんの演奏会情報  
明年2月1日(日)午後2時から、東京・紀尾井小ホールで「端唄と三味線を聞く」『露の袖』。入場料4500円(全席自由)。(問)橋音楽株式会社 電話03(333003)518